

故 名 誉 員 永 田 民 也 氏 を し の ぶ



土木学会から永田君逝去の突然のしらせに接し大いに驚いてその詳報を待ちましたが、ようやく事情が判明しました。それによると去る7月9日、同君は勤務先の豊橋鉄道株式会社へ出勤の途中急に気分が悪くなり、しばらく休憩の後、名古屋市のお宅に帰りましたが、同日午後3時、ついに永眠せられたのであります。誠に痛惜にたえません。

同君は山口県出身で明治41年東大土木工学科を卒業し、ただちに筆者等とともに帝国鉄道庁（国鉄の前身）に奉職、建設方面にまわされました。この仕事は、北陸線親不知トンネル付近の建設であり、そこで現場を受持ちました。同所付近はその後、たびたび地すべり等を起した難所でありましてその苦労も大変だったのであります。

大正8年ごろ、直接上司の鶴飼氏とともに建設方面から門司鉄道局の保線方面へ転勤、もっぱらその業務を担当し、のち、鳥栖、名古屋、上野の各保線事務所長を歴任せられ、大正15年には鉄道省ロンドン事務所の駐在官となられましたが、帰朝して昭和5年には鉄道省工務局保線課長に就任、保線業務にいろいろ功績を残され、のち、監督局技術課長に転じ、昭和10年10月に退官せられました。

退官後、名古屋鉄道会社の取締役技師長に就任、その後、傍系の名古屋車輛工業所社長を経て豊橋鉄道株式会社の業務に従事し現在に至ったのであります。

本土木学会では、昭和13年中部支部設置とともに評議員となられ、昭和17年支部長として支部の運営にあたられ、のち、顧問として現在までいろいろ面倒を見られておりました。

永田君は資性温厚篤実で信義に厚くあたかも人と争うようなことはなく誠に信頼にあたいする人柄であり、何事をするにも非常に丁寧でおちついており、軽挙暴動を嫌いました。その生涯の大部分を鉄道の技術方面に投じ幾多の功労を残されたのであります。また、筆者の知る限りでは道楽のようなものはほとんどなく、仕事そのものが道楽であったのかも知れません。前年、永田君と東大同期生の者（筆者をまじえて）が大学卒業50年の記念会を宮城県の松島で開催した時も、同君は名古屋からはるばる参集せられ、会する者7人（内2人は妻君同伴）楽しく一夜を過ぎた事がありますが、今はよい思い出となりました。

最近に至っても、何か会合があるたびごとに、同君は名古屋から上京参会せられておるのであります。健康の方でも何の故障も聞いていなかったために、このように急の訃報に接するとは予想もしなかったところで誠に残念な次第であります。ここに同君の思い出の一端を誌してつつしんでご冥福をお祈りしたいのであります。

（同期生・名誉員・山田隆二・記）